

論 文 要 旨

博士課程 甲・乙	第52号	氏名	三池 忠
[論文題名] Surrounding gastric mucosa findings facilitate diagnosis of gastric neoplasm as gastric adenoma or early gastric cancer (Gastroenterology Research and Practice Volume 2016, Article ID 6527653, 5 pages DOI:10.1155/2016/6527653)			
[要 旨] [背景] 胃癌と胃腺腫は色調や形態が似ていることがあり、上部消化管内視鏡検査において通常光のみならず特殊光を用いても十分に鑑別することは難しい。腫瘍からの生検組織は、胃癌と胃腺腫が混在する病変において腺腫部分から組織が採取された場合、病理学的に癌が診断されない可能性もある。[目的] 我々は胃の背景粘膜から胃癌と胃腺腫の鑑別が可能か検討を行った。[方法] 2009年10月から2015年1月までの期間で胃腫瘍に対して内視鏡的粘膜下層剥離術を施行した146病変を遡及的に調査した。146病変の内、術後胃、ヘリコバクター・ピロリ除菌歴の既往、不明な除菌歴、不明な血清ペプシノーゲン検査の病変を除き、検討可能であったのは88病変であった。88病変の内、組織学的に低分化型であった4病変を除き、分化型の早期胃癌の63病変と胃腺腫の21病変を対象とした。その全ての症例に対して内視鏡的画像の見直しによる胃粘膜の腸上皮化生や萎縮の再評価、血清ペプシノーゲン検査、血清ヘリコバクター・ピロリ抗体を調査した。背景胃粘膜の萎縮の評価に対して、木村・竹本分類を使用した。木村・竹本分類は胃粘膜の萎縮の程度を胃粘膜の色調変化で評価する方法で内視鏡的な粘膜萎縮の程度を軽度(closed-type: C0, C1, C2, C3)から高度(open-type: O1, O2, O3, Op)まで評価し、C0-1、C2-3、O1-2、O3-Opの4型に分類した。[結果] 胃癌と胃腺腫の鑑別において、腸上皮化生、血清ペプシノーゲン検査、血清ヘリコバクター・ピロリ抗体はそれぞれ有意差を認めなかった($P=0.424$ 、 $P=0.526$ 、 $P=0.072$)が、胃粘膜の萎縮は、全ての胃腺腫の21病変が open-type、胃癌の47病変が open-type、16病変が closed-type で有意差を認めた($P=0.037$)。またこれらの多変量解析において、胃粘膜の萎縮のみで明らかな有意差を認めた($P=0.006$)。[結論] 胃粘膜の萎縮はすべての胃腫瘍と強い関連性を認め、その程度は胃癌と胃腺腫の鑑別に有用である可能性が示唆された。胃腫瘍の背景胃粘膜が限局した萎縮粘膜を認めた場合、胃癌である可能性が疑われた。			

備考 論文要旨は1,000字程度にまとめるものとする。